

令和4年度 第2回川崎市教育改革推進会議（摘録）

日 時：令和4年11月9日（水）18：00～19：35

場 所：川崎市役所第4庁舎 第1・2会議室

出席者：藤原委員、高橋委員、倉持委員、山田委員、宮越委員、舘委員、落合委員、森島委員、
岩木委員、中野委員

（事務局）小田嶋教育長、池之上教育次長、田中教育政策室長、鈴木総合教育センター所長
荒木教育政策室担当部長、大島学校教育部長、宮嶋カリキュラムセンター室長
榎木情報・視聴覚センター室長、添野情報・視聴覚センター担当課長
永石教育政策室担当課長、豎月教育政策室担当課長ほか

欠席者：内田委員、石村委員

傍聴者：0名

司 会：豎月教育政策室担当課長

【配布資料】

資料1 川崎市教育改革推進会議運営要綱

資料2 川崎市教育改革推進会議委員名簿

資料3 かわさき GIGA スクール構想ステップ3に向けて

参考資料 かわさき GIGA スクール構想 教職員向けハンドブック～ステップ2～

【次第】

- 1 開会
- 2 教育長あいさつ
- 3 かわさき GIGA スクール構想ステップ3に向けて
テーマ1：現在の取組について
テーマ2：1人1台端末環境での今後の教育について

議題 かわさき GIGA スクール構想ステップ3に向けて

現在の取組について

宮越委員：私はこういうことが苦手な方なので、雑駁な感想しか言えないが、率直に言って、タブレットを使って、音楽とか体育ができていたというのは驚いた。授業風景がすごく一変したというか、例えば、筆箱は普通にあるのに、同じようにタブレットを置くと、ちょっと机の上が狭いんじゃないかなというふうに思ったが、そのくらい私らとしては馴染めない、知らなかった授業風景が目の前にあって驚いた。

私も新しいスマホなんかもすごく抵抗があって、なかなか馴染めないが、今見たところ、すごく新しいツールに意欲的に挑戦されているなど、トライされているなど、そんな感じで、雰囲気として、教室に活気があった。4人グループとかに分かれて、いろいろ言葉はたくさん飛んでい

るが、うるさいわけではなく、そういう意味でも子どもたちにもある程度使いこなせるのかなという印象。

ちょっと私の方で気になっているのは、いろいろあるデータを持ってきて、その画面に並べていて、小さいから読めなかったが、それが羅列されていて、その課題を深掘りするのになんか4人のグループの対話をやっているのかが、実感としてはちょっと伝わってこなかった。

でも、恐らくそれはそのツールを使うとなって、今まで掘り下げられなかったことが短い時間の中で、4人が4人とも全員の関わりを持ちながら、よい実例がこれから出てくるんじゃないかという、そこら辺も、実感としては、私はちょっと不安は持っているが、そういう期待感もある。

ちょっとGIGAスクールとは、ずれるかもしれないが、私が御幸中学校で驚いたのは、学校の運営に生徒参加をするという、生徒たちが決めた学校教育目標という、校長室の冷蔵庫に貼ってあったが、「心を磨き、地域社会に貢献できる人」と、生徒たちがこういう言葉を選んだというふうに言っていて、すごいなど。制服をLGBTを念頭に入れて、新しい制服で生徒の意見を取り入れているのも、すごくよいと感じた。

さっきSDGsというお話があって、そういうふうに地域に開かれた学校というのが実践的にSDGsを取り上げて自然とやるというのは、学校のそういった取組について私はすごく新鮮な感じがした。

私たちも地域で地域の教育力を生かした学校教育に携わる者として、そういう意味では、すごく可能性を感じた。

山田委員：先日は、お招きいただきありがとうございます。私も子どもはいるが、まだ中学生ではないので、実際に使っているところというのは見たことがなかったが、初めて子どもたちが使っている様子を見て、非常によろしくその実感が湧いてきたなというところ。

印象としては宮越委員と同じで、我々が知っている教室の雰囲気とはやはり一変しているなというところで、ここまで変わるんだなということを改めて実感した。

私が想像している以上に子どもたちは使っていたということと、それから、授業の内容も非常に先生たちが工夫を凝らして、うまく連携できるようなことをやっているなという印象があった。特に先ほどの英語の授業なんかで個別に、それぞれの習熟度に合わせたサービスをしたりとか、いわゆる個別最適化のものも少しずつ進んできているのかなと思いつつ見ていた。

あと、先ほどSDGsのワークショップで、多分本当につくられた先生たちがすごく頑張って設計されたんだと思うが、私もIT関係の業界におり、そういうワークショップに社会人ですることがあるが、このレベルのワークショップって、結構IT関係の我々でも、それなりに進んだワークショップというか、すごく設計されているような感じで、これに参加したら、すごいいいワークショップに参加できたと思えるようなものを、この中1がやっているんだというのにすごく衝撃的で、この子たちはどうなっていくんだろうという思いをしたところだった。

本当にGIGAスクールの進んだ先であったり、現実のいいところを非常にを見せていただいて、大きな可能性を感じた1日だったというのが私の感想。

一方で、先日も申し上げたとおり、この風景がどこまでどの学校まで広がっていて、どの程度の頻度でやられているのかというのは、やっぱりまだ分からない。私も分かっていない。これが毎日のようにどこの学校でもやっているのであれば、本当に素晴らしいことだと思ったが、実

際そこが、特に御幸中学校はすごく意欲的に取り組んでいる学校なのかなという印象はあったので、他の学校も含めてどのように進んでいるかというか、何らか定量的に、数値等でしっかり見えるような形で進んでいく様がウォッチできたらいいのかなというふうに思った。実際に現状はどうかなのかなというのが知りたいなと思った。

中野委員：聾学校は聴覚の学校なので、視覚優位の子どもたちが多くて、今年、また理科の推進協力校になっているので、杉本指導主事も何回も学校に足を運んでもらい、いろいろなことをアドバイスしてもらいながら、端末を使った授業というのをかなり進めている。

子どもたちの方は、私たちもびっくりするぐらい端末の使い方が、iPadを使っているが、慣れてきて、先ほどジャムボードとかを御幸中の生徒がやっていたが、こちらでも、少ない人数だが、ジャムボードを使った取組が取り上げられている。

また、聾学校は言葉を育てていく学校で、教師側も、昔は私もやっていたが、いろんな言葉を、前もって写真をいっぱい用意して、知らない言葉が出てきたら、これがそうなんだよと説明するようなことをよくやっていたが、最初の読みが外れて、こっちの言葉も知らなかったんだということがよくあった。今はそういうことが検索一発で画面が出てくるというのが、聾学校にとってはすごくありがたくて、本当にGIGAスクール様々みたいなのところもあるので、これをどんどん推進していけたらなと思っている。

館委員：保護者の視点でということになるが、ちょっと私は4日の視察に行けなかったが、別途市Pの方からは、川崎区の川中島小に理事何名かと視察に行かせてもらっている。

まず、そちらの感想は皆さんと同じで、本当に先生たちが工夫して、ものすごい活動をしているなというのが第一印象で、体育の授業とかでも使っているところを見せてもらったが、さっき動画にあったように、自分たちが取り組んでいるマット運動を自分たちで撮影して、お互いに見ながら、あと、先生からもそのマット運動の指導をしてもらいたい形で授業していた。正直私も体育の授業で、まさか使っているというふうに思っていなかったもので、本当にここまで活用しているんだなというのを感じたというのが一つ。

一方で、保護者の視点で、いくつか意見が出たのが、先ほど山田委員も言っていたが、バランスというか、GIGA端末を使うのは、それはそれで非常に先進的で、どんどん活用してほしいなと思う一方で、例えば漢字の書き取りが、あまりにも端末に頼ってしまうと、書くという能力自体がどこまで養われるんだろうというところをやはり疑問に思った理事もいたりして、当然書かないといけない場面というのはある程度あると思いますので、そういったところのバランスを取るというのが一つ課題としては本当に難しい。これは正解はないと思うが、非常に難しいのかなと感じた。

あとは、家庭学習との連携というか、保護者視点だと、昔ながらのドリルだったら、家で子どもがドリルをどういうふうに勉強しているのかがある程度見えるが、端末の中に入ってしまうと、結構そこが見えないというか、うちの場合も、端末を見せてと言うと、結構嫌がったりする。

昔のドリルだと、机の上に開いているので、見ようと思えば見られるが、端末に入ってしまうと、なかなかそこら辺が、何か恥ずかしいと感じるのか、一言言われたのは、「いや、個人情報だから見せない。」と。それは個人情報ではないよねというところで、個人情報の定義だったり、そ

ういうところの学習を親とかとしていたみたい場面もあったりして、それこそ家庭学習との両立みたいところが、保護者視点として一つ課題としてはあるのかなというふうに感じている。

森島委員：今話がいくつかあった中で、まず、大師中は今、御幸中ほどまだ使えていない現状があるかなというふうには感じている。やはり若い先生はどんどんできるというところと、なかなかそこがまだまだ入り込めないというような現状も正直あることは事実

ただ、いろいろな使い方ができるので、体育の話があったが、私は体育の教員をずっとやっておき、昔から跳び箱だとか、陸上だとか、特にマット運動なんかは、昔からビデオで撮って、それを実際に自分で見て、自分の次のあれに生かす、自分の課題を明確にするなんていうことはやっていたので、今も非常にしっかりとそういうことではできている。

それから、例えばまたちょっとこのところコロナがはやってきて、別の使い方として、みんなが体育館に入れなくても、教室で、じゃあ、体育館に一部の学年だけ入れて、全体の集会とかも、ほかは教室でということもできるし、今度うちの生徒総会は全部端末で、印刷を議案書はしないで、みんな端末でもってやっていくという、集まらなくてもできるという、そんな状況にもなっているかなというふうには思っている。

先ほど、バランスといいますか、そんな話もあったが、これはやっぱりいつでもどこでも全てにおいて、じゃあ、使えるかという、そうではないといいますか、やっぱり授業の狙いとか、それから、その単元、例えば10時間とか15時間あったら、じゃあ、最初のうちはしっかり知識を身につけさせて、後半のところでは主体的、対話的に深い学びになったところで、じゃあ、ここを使って、さっきのような話し合い活動をやったりとか、そのところでやっぱり狙うものが違ってきますので、そうしないと、何でもかんでもやろうとして、結局時間がかかってしまって、ちゃんと押さえるべきところを押さえられないとか、そんな現状もまだまだあったりはするかなと思っている。

この間も陸上競技を外で一生懸命撮っていたが、太陽光の関係で全然うまく撮れなかったりとか、そんな課題も出てきたりとか、やっぱりまだまだ試行錯誤をしながらやっている。

落合委員：小学校は幸い小教研という各教科の研究会があり、よりよい使い方というあたりを、各学校現場に情報提供してもらっているというあたりで、今映像にもあったように、各小学校では各教科、本当に子どもたちの活動スタイルがガラッと変わったという印象を持っている。

例えば1年生が学校探検といって、それぞれ校舎内を回るが、端末を持って回って、自分が回ってきたところを写真に撮って、クラスで紹介し合うとか、今ちょうど秋探しを理科の学習で4年生がしている。それもGIGA端末を持って、秋の色の変化など、自分が見つけた秋を写真に撮って、クラスでそれを紹介し合うとか、あるいは様々な考え方を子どもたちが共有するというあたりでは、やはりジャムボードはすごく印象的で、子どもたちが課題に対して自分の考え方をどんどん打ち込むと、それをみんなに共有できるというあたりで、国語は今まで若い先生が授業をすると、どうしても一問一答。この登場人物の気持ちはどう思うという、誰かが答えて、そうだねとどんどん進んでしまうという授業が、一つの課題に対して、子どもたちが考えるということで、必然的にいろんな考え方が吸い上げられているので、授業の質が高まってきたかなというふうな印象も持っている。

外国語の学習もアルファベットをやっていたりするが、ジャムボードにアルファベットを適当に入れられるようになっていて、子どもたちがA、B、C、Dと並べていく。

そういうふうに、いろいろな活用の仕方をしているので、ぜひ小学校を見に来てもらえると、進んでいる部分を感じられるんじゃないかなと思っている。

本校の1日の流れでいうと、朝教室に行って、子どもたちはGIGA端末を開ける。クラスルームに今日の予定が書かれているので、それを確認するとか、当然授業の中でも使うし、たまに週1ぐらいは持ち帰って、いざというときに家庭とのやり取りができるように、宿題を送って、送り返してもらおうというようなこともやったり、明日の連絡を送ったりすることもあるが、一方で、やはり小学校なので、書くという部分もしっかりさせたいので、宿題については、やはり紙ベースで返して、ちゃんとプリントでやってくるというのは残していくとか、連絡帳も先生方がジャムボードのクラスルームに貼り付けられると楽だが、果たしてそれでいいのかどうか。低学年などは、時間がかかるけれども、明日の予定をしっかりと管理するためには、1年生、2年生は自分で黒板に書いてあるのを書いてというのが大事なんじゃないかと考えている。

これは学校運営協議会でも、地域の方から、やはり使う場面と、やはりアナログじゃないけど、残す場面をこれから見極めていく必要がありますねなんていう意見ももらい、学校でも考えていくということをやっている。

ただ、学校行事でも有効的に使えているので、本当に学校現場は助かっているなという印象。

岩木委員：本校は中高一貫という教育で、平成26年に個人持ちでパソコンを家庭に買ってやってきた。高校からパソコンが導入されたのは平成29年度からなので、ある程度パソコンを使った授業というのに慣れてきているというか、今日の資料の中にもある、GIGA端末を活用した学習についてどのように感じているかなんていう質問を、うちの学校の生徒に聞いたら、何ですかみたいな感じになると思う。

つまり特別にそれを使うことを意識していないというか、机の上にも置いてあるし、必要であれば、授業の途中でも開けて、調べ物をしたりという使い方をしているので、あまり端末だからという意識はない気がする。

環境もすごく整えてもらっているので、新しい授業の形というのはこういうものなのかということ、ようやく私も実感できるようになってきている。

例えば書道の授業がすごく印象に残っているが、書道は、最後に書かれたものが評価の対象になる。先生は、自分の手本の動画を示すと同時に、子どもたちが書いている動画を撮らせて、それを提出させていく。結果ではなくて、書いている途中の経過をも評価する。そういうことができるようになってきたというふうに思っている。

子どもたちもいろいろな場面で使うので、総合的な探究の時間では、それぞれが市の課題に取り組むということをやっているが、そのときの調べ学習でも、これはもう全校生徒にアンケートを端末で取ったら楽だよなど。そういうことを自分たちで考えるし、生徒総会なんかで、これこれこういうふうにICTを使ったら、こういうことができるといったことを自分たちで提案できるようになっている。昨日も音楽の研究授業があったが、端末ソフトを使って楽譜の中に自分たちで音符を入れてみると音の特徴も分かるし、沖縄の音階の特徴という授業だったが、自分たちで沖縄の音階はこういうイメージだということ音符で並べてみて、みんなで共有して、沖縄の

音楽の特徴を話し合いながら、最後は多文化理解に対する意見を交わしたりしていた。

一方、保護者との信頼も深まったかなというふうに思っている。コロナ禍なので、体育祭の配信を、子どもたちがやりたいということで、自分たちで配信してくれたが、保護者の方は、先生たちがやっていると思っいろいろ御意見をいただく。そのたびに子どもたちが工夫をしてくれる。今3年目だが、今年は体育祭の配信なんかもドローンやカメラを複数台配置したりとかして、それをZoom配信してやっていました。

あと、進路説明会とか、高校のポイントになるいくつかの行事があるが、それも保護者の方に配信をして、保護者に漏れなく重要なポイントを届けられるということで、保護者から信頼いただいていると思う。

今の形がそれでいいとは思わないが、課題としては座学の授業かなと思う。資料を調べたり、もちろん掲示したりというのものもあるが、それは前からやっていたようなことだなというふうな、パソコンじゃなくてもやっていたと思うので、座学をどういうふうにICTを使って効果的にできるかということが一番課題かなと思っっている。

ちょっと長くなって申し訳ないが、定時制の方には、これまで小学校で使っていたWindows機を一人1台ずつ市から全員に配ってもらった。これもすごくありがたくて、進路調べなんかも定時制の子たちもできるようになっている。

ただ一方、不登校の子たちも多いので、さっき見たミライシードみたいな、中学生たちが学んできたような内容のソフトが、もし定時制の方でも使えるのであれば、中学校に全然行っていない子たちがいるため、その子たちにとって、学び直しの機会ができるんじゃないかなと思う。

高橋委員：この間の視察は欠席で申し訳ない。川崎の小学校へ伺ってみて、様子は大体見させてもらった。全体的に言えば、これだけ大都市で、ここまですぐまくいっている都市はほかにないというふうに思っっている。これはお世辞とかではなくて、本当に東京とかは、あまり言うとお悪口になってしまうが、そういう状態なので、この近隣で学校視察を組んでもらいたいとの話があったら、間違いなく川崎を選ぶくらいには進んでいるというふうに思っし、すごくセンターの皆さんが努力されているというのは本当によく感っしている。

なので、次は、多分それは次の議題に入っっているが、問題は宮越委員がおっしゃった、あの画面を見てどこまで勉強になっっているのかという、そういう趣旨でおっしゃったのか、ポジティブにおっしゃったのか、ネガティブにおっしゃったのか、そのことがやっぱり非常に難しくて、今のステップ2のマニュアルとか、ああいうのが、正直Googleを日常的に使っっていない人がつくるマニュアルみたいに見えっているので、それは先ほどの中学のビデオの中でも、旧来の学習指導を少し体系的にやったり、成長度みたいな、ああいうシーンに現れてしまっっている。もっともこの道具はそう使うんじゃないのになというふうに、道具の使い方が違うなという、やっぱりその辺がこの後、悪影響がなければいいなという感っ。

切りがないので端的に言うとお、Windowsはやっぱり基本設計が1990年代。iPadとかスマホは2000年代。Googleは2010年代。これだけ変化が激しいコンピューターの世界で20年違っう。だから、コンピューターを使えば何でも新しいというわけじゃなくて、新しいコンピューターを入れたら、新しいコンピューターに合わせた使い方をしなきゃいけない。だから、端的に言うとお、本当にGoogleドライブとかにフォルダを取っってしまうとか、僕な

んかは気絶しそうでそんなことはやらないので、もう世界が、使い方が全然違うのに、そういうのをマニュアルでやっていて、だから、昔のWindowsの使い方もできるようにはできているので、ただ、もっともっと自由な使い方があるのになど。そうすると、めちゃくちゃ授業も変わるのになどというふうに思っている。

僕が今関わっているところは、実際にやめようと言ったわけじゃないのに、自然と一斉にやめている。最初に変化が起こるのは落合委員がおっしゃったように小学校だが、変化が起これ始めると、中学校の先生も、もちろん高校なんかはもっとすごい変化が起こる。教科専門の先生たちの底力というのにすごく感動している日々なので、そういうのは川崎でも期待している。

倉持委員：PTAとか、地域の方も関わっているというのが私にとっては関心があるので、これからどんどん学校の中で進んでいくと思うが、家庭教育とか地域学習のモードに変えていかなくちゃいけないでしょうし、地域の人や、家庭の保護者の周りに行かなくちゃいけないでしょうし、今、高橋委員がおっしゃったように、学校の学び方がツールによって変わるんだったら、地域の方もそれを分かった上で、子どもたちの学習に関わっていかなくちゃいけないと思うので、そうするとやっぱり館委員がおっしゃったように、重要になってくるかなというふうに感じました。

藤原委員：今、国立教育政策研究所というところに勤めているが、昨年度から、川崎市の教育委員会に協力いただいて、窓口としては教育センターが窓口で、教育的な変化を補足させていただいている。教職員、教員と子どもがどう使っているのかというのを、実は性別ごとに取らせていただいている。

そういう調査をさせていただいているのと、もう一つ研究チームで関心があるのが、ICTを使って、どうすれば社会的に不利な子どもたちが学びに入れるんだろうかとか、そういうことに強い関心を我々は持ちながら研究をしている。

例えば端末を持ち帰りできるようになって、それも第一歩だが、じゃあ、同じように持ち帰れといっても、家庭に勉強部屋もなくて、Wi-Fiもないような子どもに持ち帰れと言われても、それが両方揃っているような家庭の子とは当然違う使い方になってしまう。

そういうようなことも踏まえながら、ICTを使って、いかに格差を広げない。むしろ、社会的に不利な多様な子どもたちが、いかに学びに参加できて、自分の人生を選択できるようになるのだろうか、こんな関心で、川崎市の学校を訪問している。

教育政策研究所も川崎を訪問するのが好きで、大変お手数をお掛けしているが、やはりそれだけ多様な子どもがいて、その多様性に教職員が一生懸命応答しようとしている。そこから学べる場所というのは多いのだろうというふうには思っている。

昨年度の秋の段階なので、今どんどん変化が起きている。学校現場で、ICTの使い方できているが、そのときに、よく使っている先生というのはどんな先生なんだろうかというふうな分析を各政令指定都市で我々してるが、そこでは川崎市もそうだが、一つはやっぱりそもそも主体的、対話的で深い学び、そういうような授業観というのをそもそも持っている人ほど、ICTを使いやすいということがある。だから、そもそも授業観を問い直す必要があるだろうと。

もう一つは、ICTを使ったら社会がよくなるよとか、あるいは自分自身が成長できるぞという、ICT親和性といっているが、そういう感覚を持っているかどうか。

この二つというのは、どこの自治体、政令指定都市でも共通して、そういうような感覚を持っている教師は使っている。だから、ICTを使うと何か新しいワールドを開けるぞという感覚と、いうのを持ってもらうということが大事だろうというふうに思っている。

そういう意味で、川崎市が非常にGIGA端末の責任者を孤立させないで、横展開していく。実践を共有しながら、横展開しながら、だんだん失敗例も含めながら展開していくというか、そういう仕組みと、いうのをつくっているというふうに理解しているが、この仕組みも、これが理想なんだというのを上から示されても、ちょっと遠過ぎて、なかなか行けないというところがあるので、非常にお互いに横に情報共有しながら、こんなことをやってみたら面白かったとか、そういうところに指導主事の皆さんが取り組んでいる。大変いい取組だなと思いつつ聞いていた。

今後また現場に変化を持たせて、パブリックデータと、いうのをつくって、本当にその変化を及ぼした要因と、いうのは何だろうかというあたりも調査したいので、この場を借りて、また引き続きよろしくお願ひしたい。

1人1台端末環境での今後の教育について

山田委員：ちょっといくつか今後のという意味で意見があるが、一つは、スタディ・ログについては、やはり本当にAIって、先ほども委員の方からありましたけれども、収集したログのデータを使って、この生徒はここが分かっていないよというのがわかったり、もしくはこの生徒はちょっと不登校になる可能性がありますよみたいな、そういうものがもし出てくることがあると、非常に教育現場にもよい影響が出る可能性があるのかなと。

そういう期待はある、ちょっと気になるのかなと思いつつ、それをやる上で、やっぱりいかにデータを集めるかというのが非常に重要なことだと思いつつ、特に今、全てのマスターを一元化するようなことを、国のデジタル庁が頑張っているが、やっぱりデータを収集するとき、そこがまず一番肝になる。国もできていないので、なかなか自治体も全部やるのは非常に難しいと思うが、例えば生徒であるとか、それから、教科の単元であるとか、先生であるとか、学校の施設であるとか、学校自体のITであるとか、そういうのを全てマスター化して統一化するというのも大事で、全部横串でくっつけられる効果というのが肝にはなってくるはず。そこをしっかりと整理して、データベースにしやすいように収集できたらなというのが一つと、あとは、生徒側の方の収集はそれでうまく、GIGAで非常にしやすくなっていると思うが、やっぱり先生側の方も、いかにデジタル化していくかというのも大事かなと思いつつ、それこそ自治体とかで何か作業するために同じ書類をいろいろなところに書かなきゃいけないとか、引越しの時にやらないといけないのと同じで、私も先生たちのように、同じようなことを、同じものを書いたりするようなことがあったりするのではないかなという想像の中で、そこをできるだけもっと簡略化して、デジタル化して、フローをうまく最適化していった上で、おのずとデータが集まってくるみたいな形をつくっていったら一番いいのかななんて思いつつ見ていたというのが一つ。それがスタディ・ログについての話。

あとは、地域とつながっていくというステップ3という話でいくと、やはり先ほどもコミュニティスクールの話もあったが、今後川崎市コミュニティスクールがどんどん進んできている中で、

地域の人とつながっていくような学習というのも何かできていたら本当にいいなと思っている。

例えば地域で働いている人と、どういうふうに働けるのかというのをインタビューしたり、そういう形でM e e tとかで話をし、それを学校で発表するということができたらと思うし、何か地域の人と関わりながらやる授業というのができたらなと思った。

あとは、結構ハードルが高いかもしれないが、学校の情報を外に発信する。逆に、発信する方というのを本当はできたら面白いかなと思っていて、私が知っている限りだと、千葉県の小学校とかで、生徒にブログを書かせるという学校があって、いろいろな生徒がブログを毎日、日々更新して、発信していくということで、外とつながっているというのを実現している学校があるというのは知っている。いろいろ課題はあるそうだが、何かあったら非常に問題になりやすい状況なので、気をつけながらもそういう取組をしているところもあるので、何か少しずつでも外とつながるようなことが川崎でもできたらいいのかなと思っている。

落合委員：ステップ3に向けて、ただ、先ほど小学校も頑張っていて、いろいろなことをやっているという中で、やはりまだ得手不得手が職員にあり、各学校、週1回とか、月1回の職員会議では、こんな活用方法があるんだよなんていう、あるいは先ほど言った小教研の情報とか、結構それを広め合っているところなので、ステップ3は、できればステップ2を定着化させていく。今取り組んでいることがいかに全ての教職員にしっかりと位置づけるような形で進めていければいいかなというところが一つと、地域と関わるということでは、地域素材を生かした学習活動も小学校は多いので、実はコロナ禍で、町の工場には見学に行けなかったもので、その工場の方がDVDをつくってくれて、子どもたちに語りかけるようにすごく上手につくってくれたものを使ったが、やはり一方通行だったので、それがM e e tでできればいいかなと。

5年生の工場見学などでは、M e e tでできているというのはあるので、それが地域でできたらよいと思う。うちは今回梨の学習をやっているが、天候に左右されるので、梨農家の方とM e e tでつなぐというのも、よいかなと思う。

それから、国語研究会にお願いしてみようかなと思っていることは、実は川崎市は子どもたちの「文詩集かわさき」という文集とか詩集の作品をつくっている。それが1冊の冊子になっているが、以前は、それを学習で使って、感想を子どもたちが書くと、先生が逡送便でその学校に集配を送ってあげるというのがある。これがそれぞれの学校の担任の先生のM e e tがもしつながれば、大人たちはクラスルームをつくってつながっているので、ある学校とある学校の担任の先生がお互いにつながっていると、そのクラス同士で感想を言い合えるというができないかなと。これから他校ともつながる方法を少しずつ考えていくというか、小教研等でもやり始めているかと思しますので、それを情報共有できればいいかなというふうには思っている。

宮越委員：ちょっと私が不安に思っていることは、今、スタディ・ログ自体がよく分からないが、子どもがインターネットを使うというところで、割と簡単に情報を得られる。ただ、その情報ももしかしたらフェイクニュースかもしれない。何か新しい発見を意図的に示唆するわけではないようなデータがたくさん子どもたちの目の前にある。そういうものについて、防御というよりは、そういう選択能力。A Iの場合、過去のデータが基になっている。でも、新しい考え方、例えば倫理観とかというのは、そこではなく、弱いように感じる。そこに子どもたちが関わっていくし、

学習の実践とか、そこにデジジャブのように、私たちは警戒心が強いから、どうしてもそういうふうに言ってしまうが、その辺をどんなふうに子どもたちに伝えているかというのがちょっと気になった。

館委員：ちょっと別の視点の話になってしまうが、今年度、PTAは子どもたちの居場所について考えましようという形で、ちょっとした研究会を開催したが、その場で話として出たのが、学校に行けない子ども。学校の中に入れる子で、ちょっと教室まで行けない子というのは、当然先生方もいろいろケアしてくれるわけだが、今やっぱり増えているのが、そもそも学校に行けないという子どもたち。家の中にずっといるという子もいるし、あるいは外にいるという子もやっぱり一定数いる。

なので、私は実現できたらいいなというふうに思っているのが、それこそ地域力じゃないが、例えば川崎市って、こども文化センターみたいな施設があるし、ああいったところをうまく居場所として活用できれば、そして、さらにGIGA端末も活用して、例えば、こ文で寺子屋の先生が来て、学習サポートをしてくれるとか。学校内にどうしても入れない子が一定数いるので、そういったところは、今はフリースクールや川崎市の場合はゆうゆう広場という施設があるが、まず、数が絶対的に足りない。あと、地理的に施設から距離が離れている家庭だと、どうしても子どもを通わせにくいという実情もあるので、そういうところが川崎市は施設も揃っているし、寺子屋の先生みたいな、子どもたちの学習をサポートしてくれる人材も豊富だということも、リソースがすごく揃っていると思っている。そこをうまく有機的に結びつけられれば、結構今増えている不登校の児童生徒の学習支援ということが川崎市はかなり可能性が高いのかなと思っている。

そういったところをGIGA端末をうまく活用して、ステップ3の話とは全然違うが、例えばSOSをキャッチするシステムみたいなことも、学校に来ていなくても、GIGA端末の稼働状況で、この子はGIGA端末を使っているんだなみたいなこともキャッチできるとか、そういったいろんな活用方法が見えてきたのかなと思ったりしている。

藤原委員：ステップ3というのは、まだあまりよくイメージが掴み切れていないため幅広くなるが、データの利活用、これまでの本市の勘というのはこれからも大事で、やっぱり総合的に子どもを捉える能力というのはこれからも大事だろうと思う。

そういうような能力と、補完していくというか、力を合わせて、データ利活用というのを使って、教育を充実していくようなワールドへと入っていくというふうに思う。

ただ、入っていくときに、恐らくこれを学習ログの活用とか、ダッシュボードをつくるとか、そういう話になってくると、これまで教育委員会にある専門性とちょっと違う専門性が必要になってくると思う。

私どもはデータサイエンスセンターというのをつくっているが、やはりそれは今までの専門性と違う要素が必要とされるようになってきている。そのため、我々も今ちょうど公募をかけているが、情報学のプロパーというのを我々も確保しようと、今ちょうど公募している。

だから、これをやろうとしたら、もちろんいろいろなデータを利活用しようと思ったら、教育委員会内部に専門性がない領域であるというのは、もうリアルにやめたほうが私はいいだろう

というふうになっている。そういう情報系の人を探るのは今ものすごく難しいので、やはり各自自治体で工夫しながら、常勤でなくても、どこかに籍を置きながらも、パートタイムで働くような人を雇用したり、そういう工夫をしながらでも、やはりないものを確保しようというのは努力をしているんだと思う。

そういうようなことで、指導主事だけではできない、あるいは教職員だけでは恐らくできない領域に突入しようとしているんだと思う。そこでやっぱりいろいろなところと組みながらでも、教育委員会職員の活躍の場面というのは当然あって、最終的に学びの質というものを高める、デザインをつくるという役割は残る。教育委員会職員も、最終的に学校で使える、子どものためになるようなものをつくっていくということで大事なんだろうと思っている。

それはちょっと新しい発想でやらなきゃいけないものと、もう一つは、学校の先生方って、データを使って教育をやるという文化がそもそもない。全然使っていない。

なので、まずは先生方の、データを使ったらいいことあるねという、このツールを使ったらいいことがあったよという経験をだんだん積み上げていかないと、先生からすると、距離感があり過ぎる。データ利活用とか、そういうところはちょっと距離感があるので、そういう何か先生方が使うような仕組みをつくる。データを使うような仕組みをつくっていったら、やはり使うといいねというような、そのように醸成していくというステップというのが大事になってくるんじゃないかなというふうには思っている。

我々も答えをもらいながら進めている、そういう領域なので、大変だと思うがお願いしたい。

岩木委員：高校なので、模擬試験を定期的に行っている。今、模擬試験の結果分析のソフトみたいなものがついていて、そこに限ると、この子はこの分野が弱いというのが実際に出てくる。だから、さっきのスタディ・ログの話は、そういうイメージなのかなと思いついて聞いていた。

ただ、結局それが出たとしても、それを基に、子どもたちにどういうふうな形で面談するのかということが重要で、それはあくまで結果なので、この子はこういうことが弱いということが見えたときに、ふだんの学習を通していろいろな子の話をしています。

今、川崎高校の中では、その面談の結果を、いろいろな教員が共有できるボックスに入っているので、例えば進路の先生と話をするとき、それを踏まえて話をしたり、進路の先生が面談したことを踏まえて担任と話をしたりというような形で活用できている。

そのデータをいろいろと積み重ねていないと、定点観測じゃないけれども、継続して見ていくことでわかると思うし、時期的に、去年との比較の中で、子どもたちとの面接でデータを比較することもできると思うので、何となくそのイメージなのかなと思いついて聞いていました。小中学校ではちょっとまた違うと思うが。

倉持委員：全然違っちゃうかもしれないが、ステップ3では「子どもが主体的に社会課題を解決」という目標が掲げられていて、そうすると、教育そのものが、子どもが将来的に社会課題を解決する主体として育てるというのはもちろん重要な要素もあると思うが、教育の中で社会課題、地域課題について自ら主体的に解決していく、主体になるということなんだろうなって聞いていた。

そうすると、おのずと地域課題や家庭課題、教育の中というところで、教科横断的にもなるでしょうし、学校という媒体も超えていくでしょうし、関わるのも教室の中だけじゃなくなってく

るだろうしということが想定されているのかなというふうに想像する。そうなってくると、やはり地域の課題、大きく社会課題だと思うが、地域に参画する子どもや若者という観点みたいな、将来参画するという主体じゃなくて、今参画する主体としてどういうふうに地域の人と関わっていくのかという、教育の中でもすごく大きな問題になってくるのかなというふうに思っている。それが教育の中で実現し、子どもたちが実感できるとしたら、それは非常に子どもたちにとっても意味があるでしょうけど、地域や社会にとっても、子どもの教育によりよい形で取り入れていたり、あるいは例えば、地域課題に取り組んだとしたり、じゃあ、地域の方にも直接的な関わりができるかもしれない。子どもたちの方が進んでそういった活動が地域の人たちに直接的に影響して、地域の活性化や地域社会づくりにつながっていくかもしれない。お互いに実感できるようになると、オンライン上のツールを使うということと、リアリティ、生のつながりが増えるという、両方往還していくという、そういう教育を目指しているといのかなと思うと、さっきの教育の枠組みみたいなものを取り返していかなくちゃいけないという形も、藤原委員の話にあったが、やっぱりちょっと教育観というか、大分変えていかなくちゃ、地域の方もそれを受け入れる体制をつくっていかなくちゃいけないと思うが、教育の在り方が変わってくるのかなというふうに思って、最近、やっぱり観光問題だとか、そういったところでわかる形で発信されるようになってきたのは、参画するようになってきたのは、やっぱりこういうSNSをはじめとしたツールが増えてきているということが両輪としてあるけれども、一方で、それこそいろいろな情報に対して、どうリテラシーを持つかというのは、すごく大きくなってきている。教育にサービスラーニング的な要素を取り入れつつも、資本教育みたいなところをやっていくかということと、やっぱり道具として使うだけじゃないんだなという、今日の話聞いていて思って、そういう大きな教育の構図を、地域にとってもそれが気になる。地域を支える教育の形だし、それはおのずと学校が地域に開かれていくというようなことを教室で展開していくということになるんでしょうし、何かそれを実現していくとなると、ステップ3というのはすごく大きな取組になるかなというふうに思ったので、それに向けて、まずはステップ2を確実にして、試行的に取り組まれていくといいのかなというふうに思った。

高橋委員：先ほども伝えたとおり、川崎市は本当に大きな都市で、チームワークもよく、ここまで来られたというのは本当に奇跡的だというふうに思っている。

だから、足りないと思ってしまうのが、イメージとしては、エンジンの最高峰を目指しているように見えちゃう。これからEVとか、根底から変わってくるのに、テストの点みたいなものを見てアドバイスという、そんな小さな話でいいのかと。

僕は国のデータの管理も見ているが、非常に複雑。今一番進んでいるのは渋谷で、今度はさいたま市でやっていて、だから、様々な市でやらなくちゃいけないと思っているかもしれないけど、あの枠組み自体が古いのではないのかという疑いすら、僕は持っていた方がいいと思っている。そういうふうにして思ったときに、先週か何かの内外教育でも書いたのが、例えばマクドナルドが、最近注文の仕方が変わったというか、加わった。まず座席について、席で注文をする。そうすると店員さんが商品を持ってきて、今までみたいに長蛇の列に並ぶ必要はないし、店員さんに急かされて、慌てて注文することはないし、座席についてゆっくりクーポンを選びながら、選ぶこともできる。非常に人間らしい。

僕は、だからICTが入るって、結局順番が変わったり、手順が変わったり、手順が省略されたり、手順が統合されていくことだと思う。そのことを常に頭に入れていかなきゃいけない。

今まで私たちが授業を見て思ったのは、紙や鉛筆や黒板があったときに、それしかやりようがなかったから、そういう授業をしていたんじゃないかなと。常に疑わなきゃいけないんだと。僕は今そういうふうにして、みんな見ている。

川崎だから言うが、Windowsで、ファイルで、メール添付でという仕事の仕方と、この紙の仕事の仕方がすごく一緒。例えて言うと、僕はいろいろな企業とも共同研究をしているけれども、古典的な日本の企業は会議の前の日に、夜中に大量の資料が添付資料で送られてくる。ぎりぎりですみませんという言葉と一緒に。

だけど、Googleとか、ああいうので管理すると、随分前に書類がURL、置き場所が送られてきて、ファイルが送られてくるのではなくて、ファイルの置き場所が送られてきて、当日までに何とかしておきますという。置き場所をたまに見ると、議論が起こっているのがわかって、こっちがちよいちよいちよっかいを出すで議題が減っていく。同日は要旨の確認ぐらいで、今日はじゃあ15分で会議が終わりますとか、そういう感じ。

だから、今までも共有フォルダに保存して、メール添付するというのは、印刷して最新版ですというのと同じで、メールも次々に、最新版の最新版ですとやって来ているので、ずっと同じだけど、今はファイルの置き場所でやり取りすると、常に見たときに最新版というような、根底からいろいろなことが変わっているんだという気がする。

そうすると、一番大事なことは何なのかということのを常に問わないで教育データの活用をやっていると、多分路頭に迷う。今日のこの会議で聞いていても、いろいろな子どもがいるという話が出てくる。不登校の子がいるとか、勉強が得意不得意な子がいるとか。

やっぱり僕は、根底は一人一人という当たり前のところに戻るんだと思う。子ども一人一人、コンピューターが一人1台渡ったんだから、一人一人の可能性を、幸せを願って一人1台コンピューターを使うことを考えていくしかなくて、そう考えていくと、一様な使い方はないわけで、一様な使い方がないということは、じゃあ、教師が、君はこう使いなさい、あなたはこう使いなさいとやれるかというは無理で、自分で使い方を決めてもらうしかない。そういうふうに指導していくしかない。自分で使い過ぎないようにするし、今自分が閉じた方がよいのであれば閉じてもいい。書く力が衰えているんだったら書く練習をしたらいい。自分で決めていくしかない。そういうような世界観だと僕はすごく思っている。

だから、本市の授業でいうと、一人一人といたら、今までの一斉の単線型の授業でなくて、複線型のイメージができるかどうか。授業の複線型のイメージができたときに、個別最適とか、自由進路学習とか専門用語があるが、あれは複線型の授業の一つの形を示している。要は、子ども一人一人に力を入れたり、合うように指導したり、それは複線型の授業になるしかない。言い方としては、個別最適や自由進路学習とか、そういうのもあるんだよと。

だけど、今みんなテスト勉強的に、どうやって個別最適を実現していいとか、自由進路学習を説明するかと考えたとき、要は一人一人の子どもに力をつけたくて、そのバリエーションを語っているだけなんだというふうに、やっぱりそういうところから考えていくと、僕が今関わっている学校、特に中学校は爆発的だが、自分で勉強していくための学習過程、どういうプロセスで勉強していったらいいのかということのを常に子どもに考えさせたり、見方、考え方みたいな、ほ

かの教科、どこの教科、文科省的には教科という見方があると思うが、僕が言っているのは、どこの教科でも役に立つような、そうじゃないと使いものにならない。そういうのをすごく指導すると、結局子どもがいろいろなことを学習する。

先生が、さっきから授業観が変わるのが結構大事という話をしているが、先生の授業観が変わるとしたら、子どもに影響されているなんていうことはほとんどないと思う。

大学で今みたいな話をして、いろんな現場で話をして、ただの1回たりとも変わったことはない。だけど、子ども一人一人の声を聞くためにタブレットを使うのであれば、必ずスプレッドシートみたいなもので子どもの声を聞けと。そこに、後でAIドリルとか、YouTubeで有名な講師の動画を見てきましたとか、辛辣なことから、僕はこういうことで悩んでいるとか、そういうこともいっぱいあって、そういうことを先生たちが、こんなに子どもたちはいろんなことを考えているんだと、特に中学校なんかは面白くて、体育の先生が、だから数学は駄目なんだよみたいなことを言い出して、それは体育だから、全員できるわけではないとわかっているから、全員同じ練習をしないわけで、もともと体育は複線型。だけど、数学の人たちが終わらないという理由で、単線ではばっと説明する。それで終わったことにしていただけたらという話になって、激論が起こって、だんだん落ち着いて、ハイブリッドになる。単線と複線の混ざったものが数学の人たちの答えとなるが、そういうふうに授業の形は全く変えてもいいんだと。子ども一人一人の声を拡張する道具としてこれがあると。

これで書く力をつけるとか、計算する力をつけるのではなくて、子どもの声を聞く道具として、まずは使ってみるとよい。そうすると、それが実はデータ活用になる。これまでは手を挙げて、ごめんね、先生だって皆の声を聞きたいけど、みんな聞きなさいとしていたのが、全員の声が聞こえる。一人一人というキーワードで、本当にもうどんどん授業が変わっていく。

だから、そういう意味で、そういうやり方をするのもデータ活用だし、さっきのAIドリルがどうのこうのみたいな話は時間が経って分かったけど、僕は買えばいいんじゃないのと思っている。企業が最後にできないのは、今みたいないろいろなタイプの子どもがいて、その子たちにどう支援していくのかみたいなのは、人間がやっていくことが必要で、もちろん自力で最後は解決して行って、だから学校があって、社会に卒業するというようなところがあると思う。そういう考え方で、常にマクドナルドみたいなイメージ。今僕が関わってうまくいっているところは、先生たちがすごく楽しいと言う。今まで先輩に練り上げてこうあるべきだとか、こう発問するべきだと、ずっと授業づくりを られてきたものが、変えていいということになったから。僕たちが新しい授業をつくれるんだと。だけど、若者は力がなさ過ぎて、35歳ぐらいの人が本質的な授業をやる。若者はすぐにそれをコピーしてやり始めるので非常に面白くなっている。

なので、それは結局、ステップ2でぼつりぼつりと出てきているいろいろなことが統合されていくイメージ。一人一人の子どもの力をつけるみたいなイメージで、このステップ2を見直してみると、最後のステップ3の一番最後の取っ掛かりなると思う。

僕はそういう図を最近書いて思ったので、また何かのときに。期待しています。

(19時35分 閉会)